



MIXI知財室に学ぶ、 AIエージェント型 業務変革の解剖学

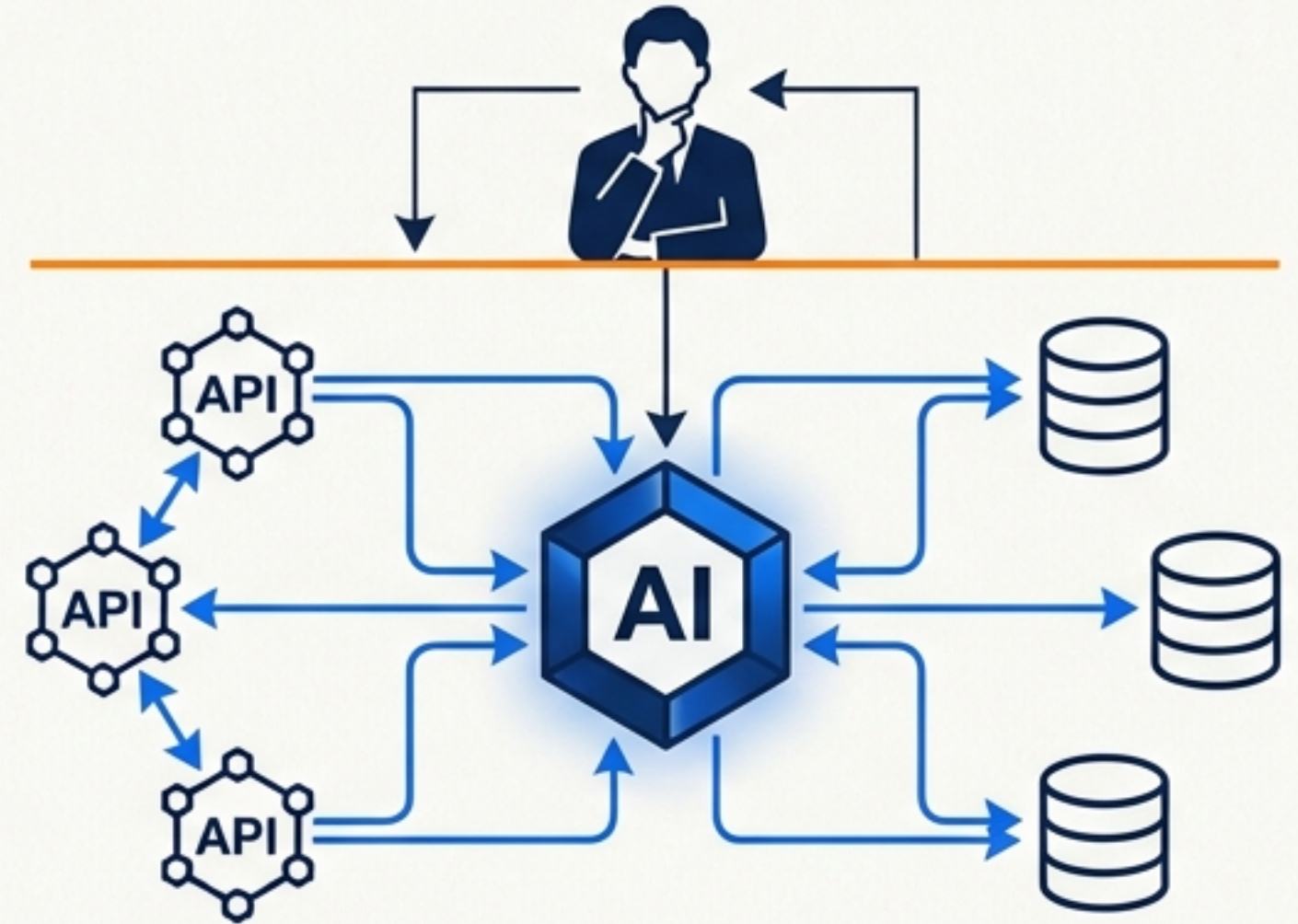
「文章作成ツール」から「自律型ワークフロー」への
転換と、持続的競争優位の構築

単なる文章作成ツール



個別作業の効率化（点）

自律型知財ワークフロー



業務プロセスの再設計（線と面）

MIXIの取り組みの本質は、生成AIを個人ツールとして導入したことなく、
受付・情報収集・分析・ドラフト作成・人的判断・蓄積に至る一連のフローを「AIエージェント」を中心に再構築した点にある。

圧倒的成果（MIXI公開資料より）

最大 **90%** 短縮

特許出願リードタイム
(1-2ヶ月 → 1週間以内)

60~70% 削減

FTO調査期間
(2-3週間 → 1週間以内)

最大 **85%** 短縮

中間処理対応時間
(半日-1日 → 1時間以内)

60~80% 削減

外部掲出物チェック知財稼働

1~2分 へ短縮

商標区分判定
(最大30分から)

他社導入に向けた不足情報（独自検証が必要な必な領域）

☒ 品質領域：

☒ エラー率・AIの見逃し率・
最終成果物の修正率
(初稿作成時間の短縮 ≠ 総工数削減)

☒ 難易度領域：

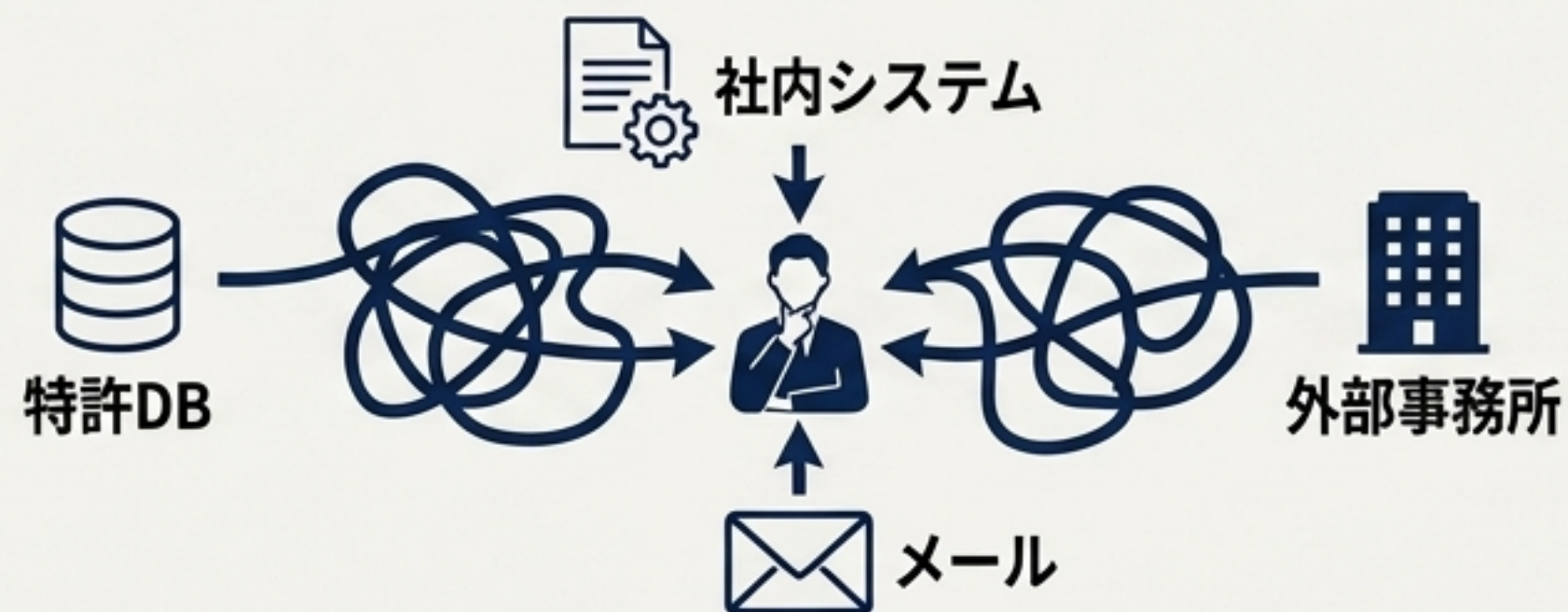
☒ 対象案件の難易度分布
(高難度案件への適用力)

☒ 財務領域：

☒ API費・モデル利用料・開発工数・
外部事務所費の削減額（財務的ROI）

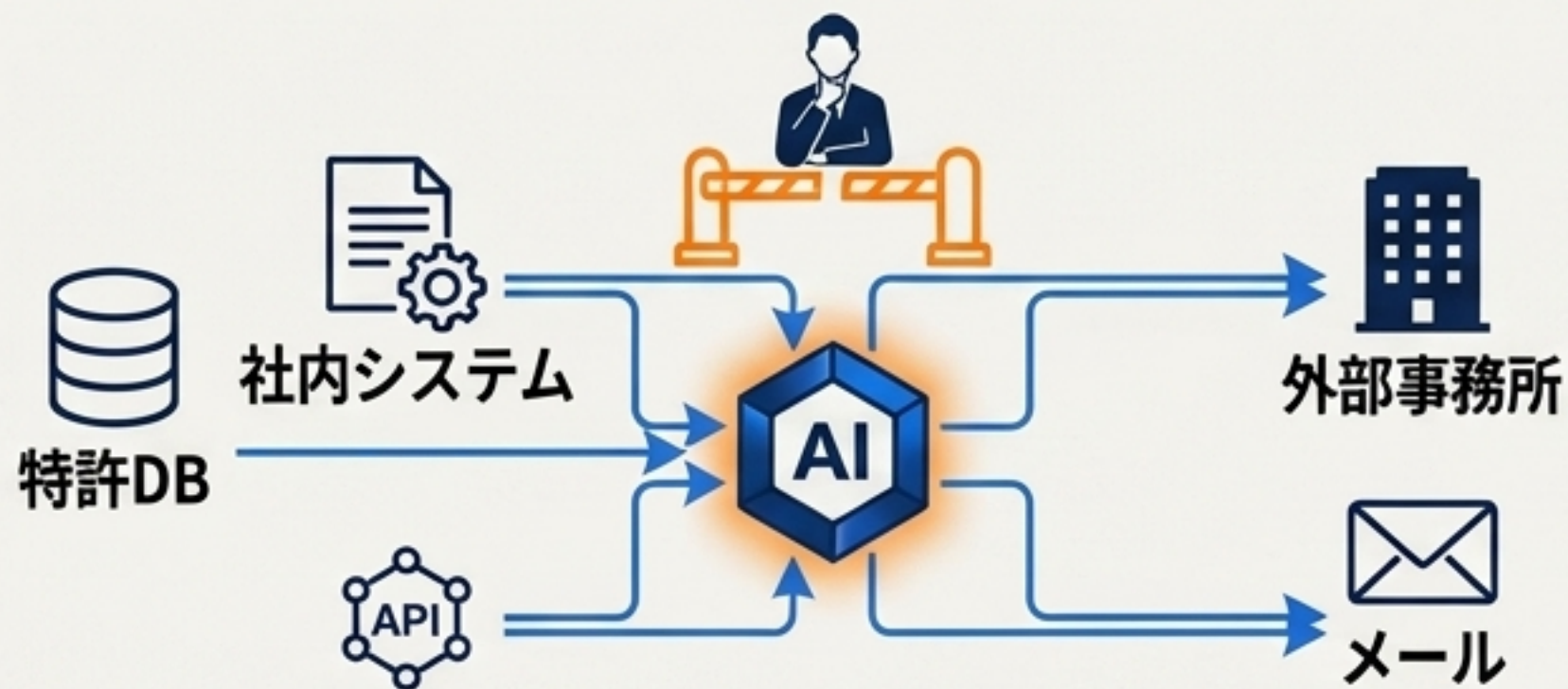
結論：公開された成果は極めて有力だが、速度KPIだけでなく「精度・監査可能性」を独自測定するフェーズが不可欠である。

従来型モデル：人がハブ



人が自ら検索実行・情報収集・
文案作成を行い、工程間の
データ移動を担う。
「作業者」としての役割。

AIエージェント型モデル：AIがハブ



AIが各種APIや社内DBを
自律的につなぐ。
人は「要求設計」「評価基準策定」
「最終意思決定」に集中する。
「レビューアー」への移行。

「チャット画面に人が張り付く方式」からの脱却

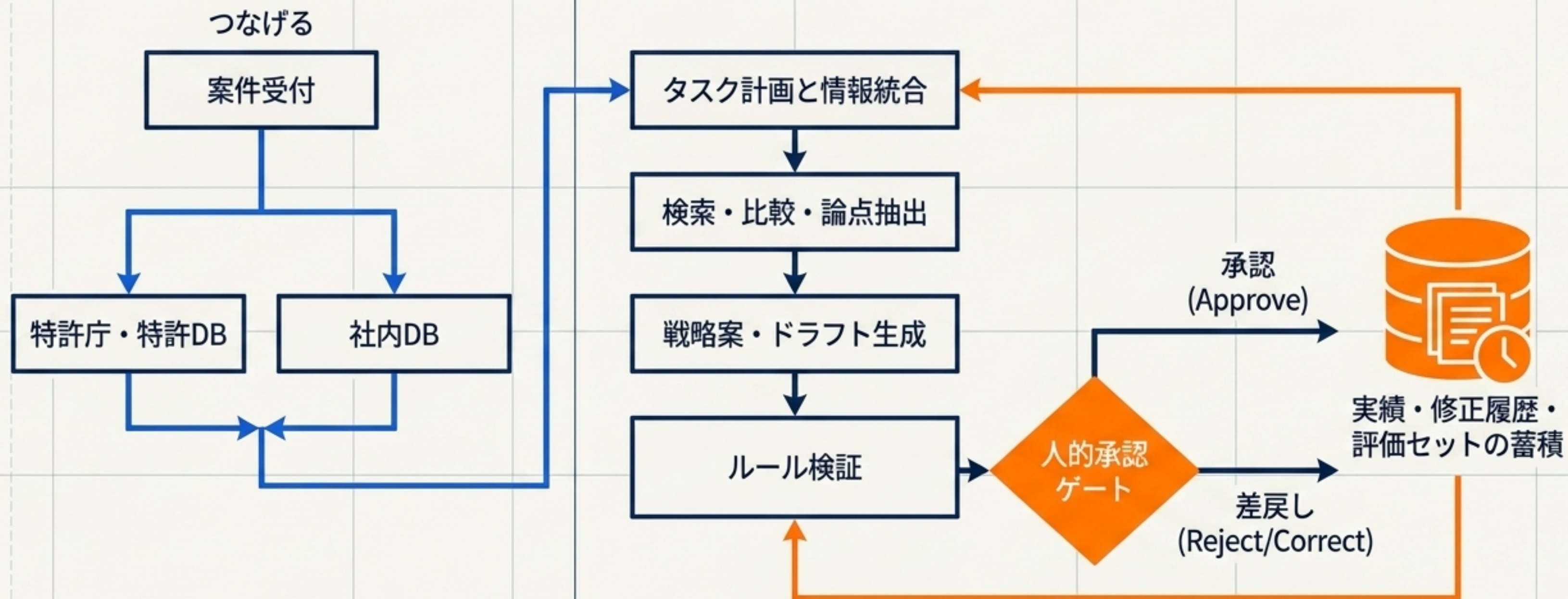
業務工程	AIエージェントの役割（自動化）	残すべき人的判断（ガバナンス）
特許出願	AIドラフトを基礎に社内レビューを高速化（待ち時間縮小）	権利化方針、クレーム範囲、新規事項、実施可能要件
FTO調査	数百件の公報を数件～数十件へスクリーニング	クレーム解釈、均等論、実施態様、最終的な侵害判断
中間処理	引用文献収集・論点抽出・複数の対応戦略案（狭い補正/広い権利/分割等）の提示	補正の許容性、事業上必要な権利範囲、審査官対応戦略
外部掲出物	著作権・商標・肖像等の複数観点で一次判定（問題なし案件の自動通過）	炎上文脈、例外承認

原則：AIを「選択肢生成装置」として利用し、
事業価値と権利範囲のトレードオフという高リスク判断は人間が担保する。

制御された自律性を生む9層のアーキテクチャ

9. 監査層	モデル・プロンプト・承認履歴の記録	改ざん防止
8. 学習・評価層	修正履歴・失敗例を評価セット化	秘密情報の再利用制限
7. 承認層	専門家が採否・修正・対外提出を承認	職務分離・二者承認
6. 検証層	形式、引用、用語、法的条件を検査	ルールとLLM判定の分離
5. 生成層	対比表、対応案、ドラフト生成	根拠のない断定禁止
4. 推論・計画層	処理順序、論点、追加調査を計画	ツール利用許可・費用制限
3. 検索・RAG層	関係文献・社内基準の検索	権限継承
2. データ取得層	公報・経過・ファミリー等の取得	原典URLの保存
1. 入力・案件管理層	案件ID、機密区分の付与	案件混同防止

「つなげる」と「育てる」の統合サイクル



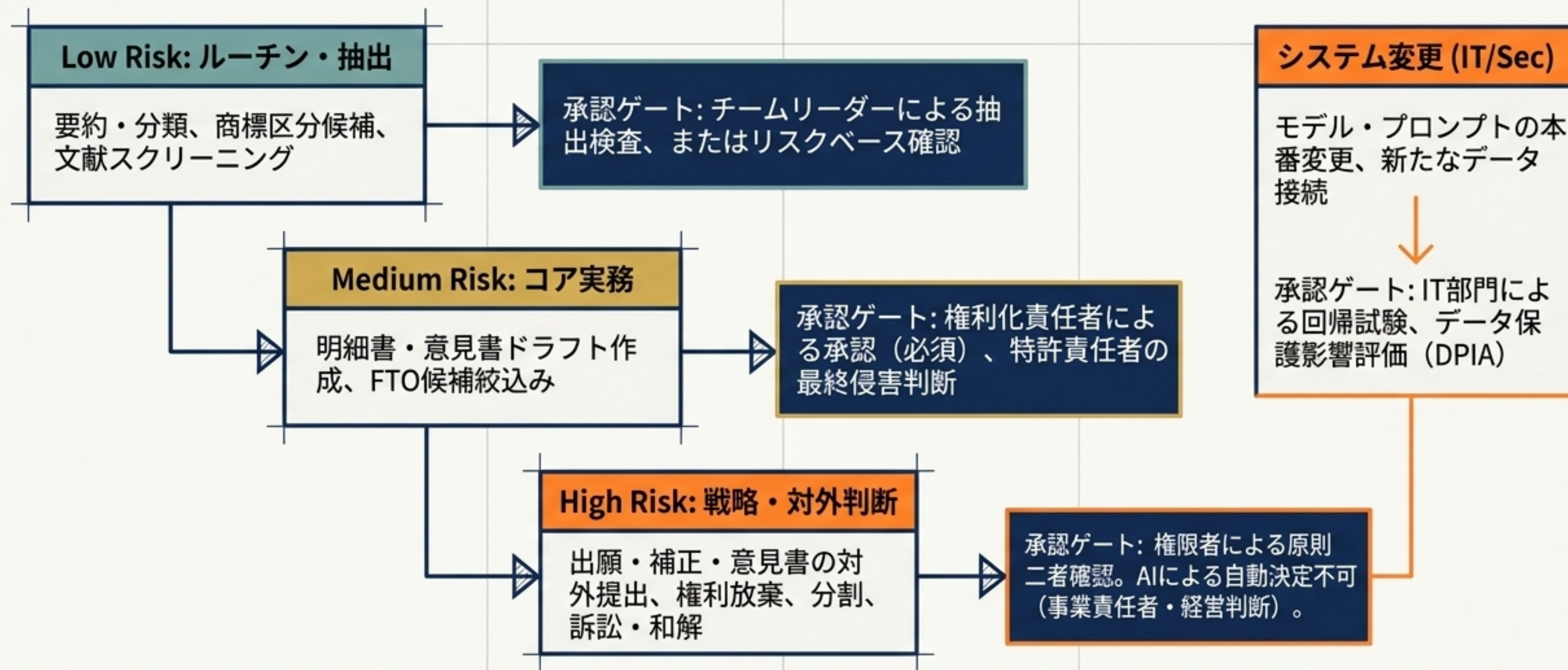
高性能なモデルを選ぶことより、「データ接続」「人的承認」「改善履歴の蓄積」を一体設計することが持続的な競争力となる。

「処理組織（コストセンター）」から「戦略組織（事業価値創出）」へ

役割（Role）	従来（Legacy）	AI導入後（Post-AI）
知財担当者 / 専門家	自ら検索・収集・文案作成の主体。	要求定義、例外処理、AI出力評価、難案件対応、AI基準の作成。
調査担当者	検索式作成と公報閲覧。	検索戦略設計、検索品質（見逃し等）の評価。
知財マネージャー	件数、予算、期限、人員の管理。	AIポートフォリオ管理、リスク許容度設定、創出時間の投資配分。
事業部門・経営層	案件依頼とコスト承認。	戦略仮説の共同設計、AI利用範囲と再投資先の決定。

求められる新スキル：「AIにうまく質問する能力」以上に、
「専門家の暗黙知を検証可能な基準へ変換する能力」が不可欠となる。

リスクベースで設計する人的介入と承認フロー



生成AI×知財業務に特有のリスクと緩和アーキテクチャ

幻覚・誤情報 (Hallucinations)

存在しない判例や期限。

→ 原典リンク必須化、ルールベース
期限計算、人的承認。

FTOの見逃し (Missed Clearance)

関連特許を低リスクと誤分類（損害
賠償リスク）。

→ 再現率(Recall)重視の設定、ラン
ダム抽出監査、最終目視。

秘密情報の漏洩 (Data Leaks)

未公開発明や面談情報のモデル送信。

→ 企業契約（学習利用除外）、
マスキング、データ分類。

過剰な自律性 (Over-autonomy)

AIが誤って案件情報を更新・外部へ
送信。

→ 読取専用を初期値とし、書込み・外
部送信は承認制（サンドボックス）。

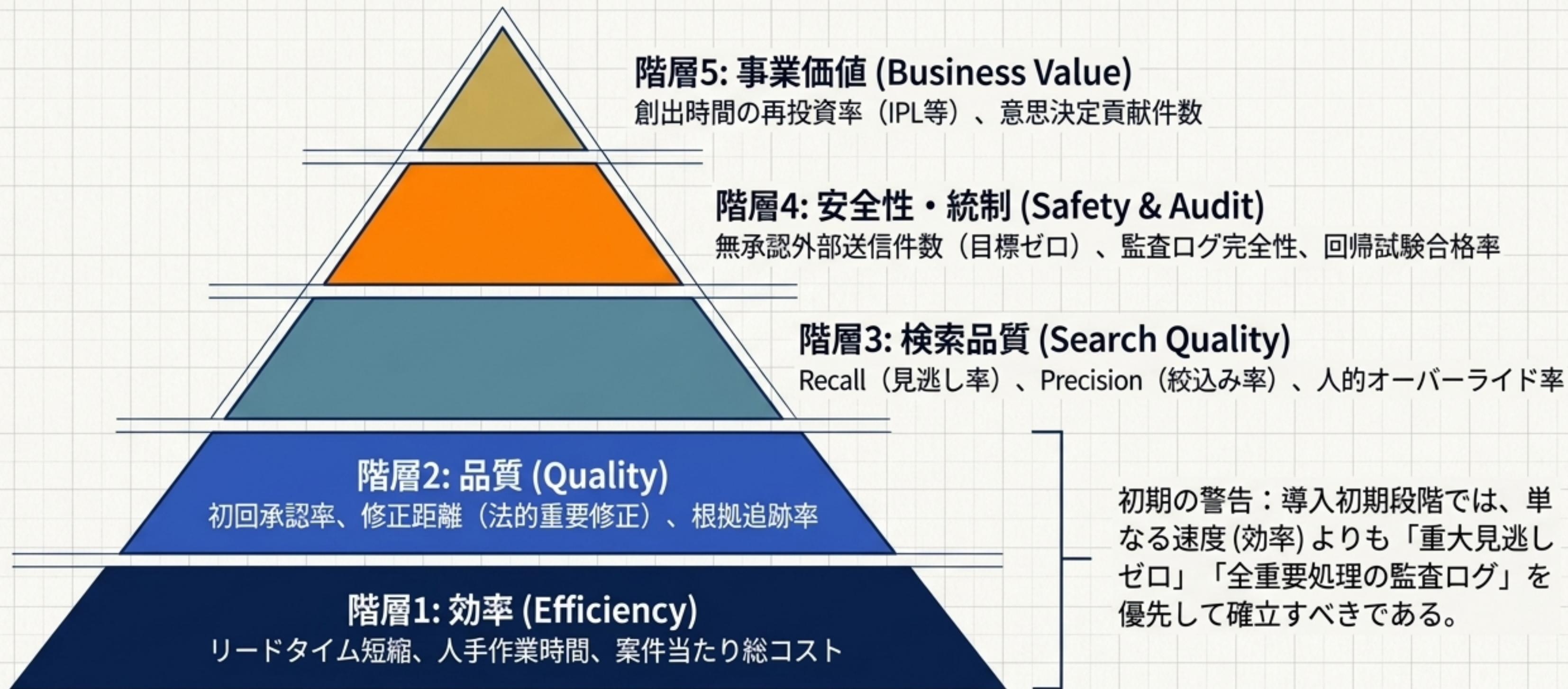
モデルドリフト (Model Drift)

モデル更新により品質が非再現に。

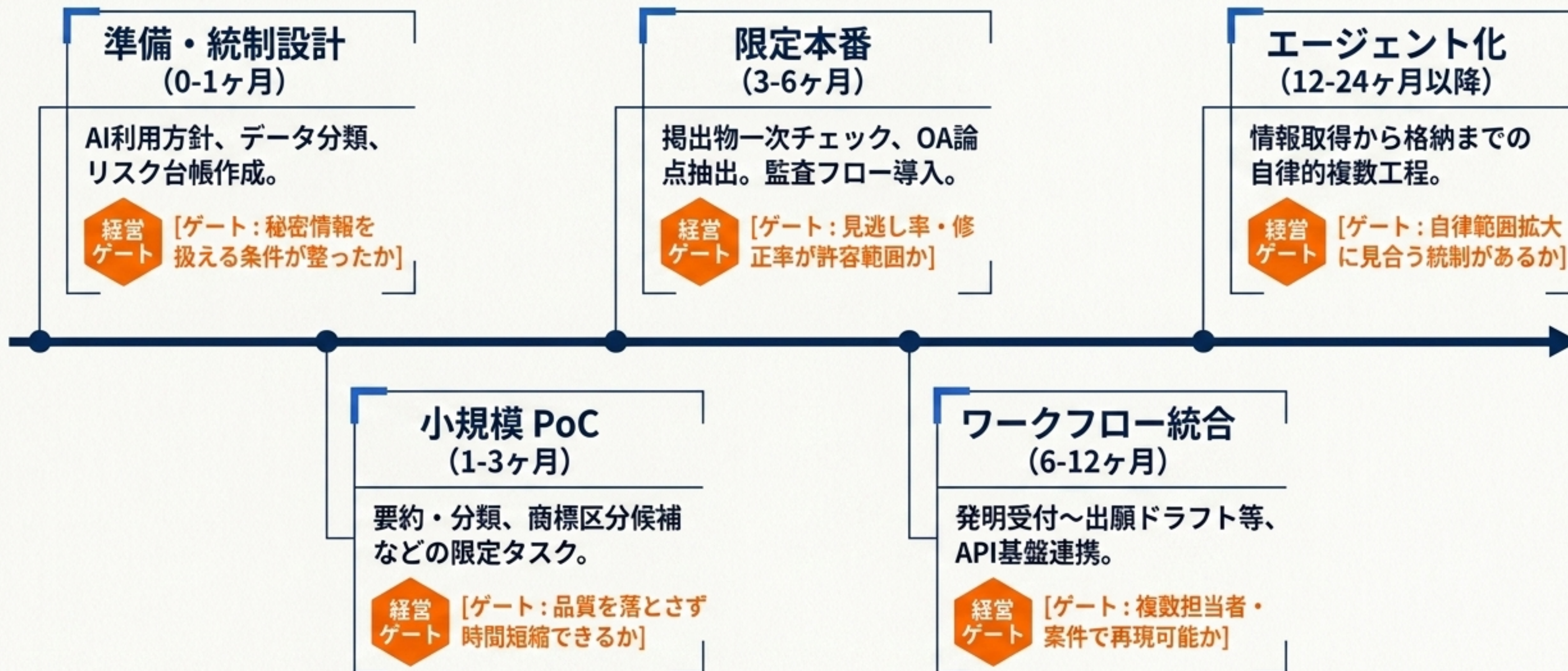
→ モデル版の固定、プロンプト変更
前の回帰試験。

経産省ガイドライン準拠：AIへの「依拠・代替」が進むほど、事業者側の品質管理と説明責任の要求レベルは高まる。

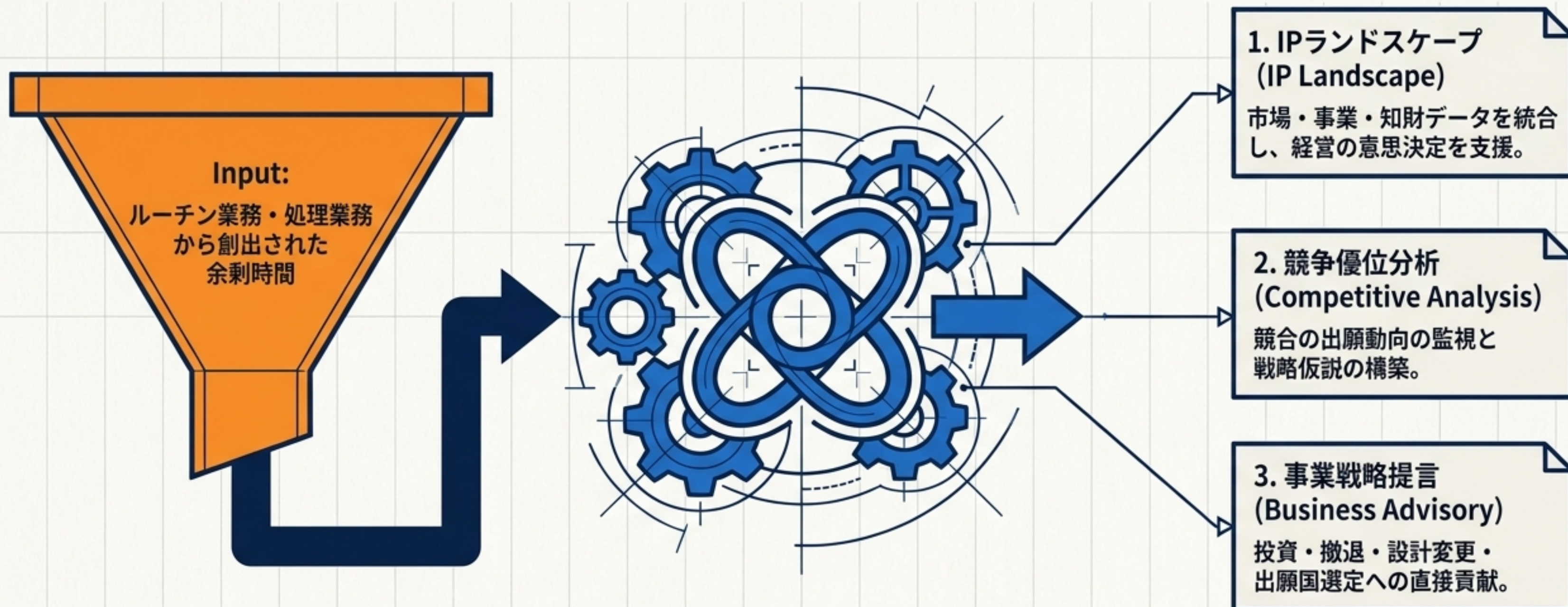
5つの階層で測るAI導入の真のKPI



エージェント統合への段階的ロードマップ



創出された時間の戦略的再投資



AI導入の成否は「何件処理できるか」ではなく、
「創出された時間をいかに企業価値向上へ再投資したか」で決まる。

本レポートからの4つの重要な示唆

1. フロー全体の再設計

モデルの文章能力よりも、外注・待ち時間・回覧を含めた「業務全体の再構築」がリードタイム削減の鍵である。

2. 判断基準の資産化

専門家の暗黙知（評価基準、FTO絞込み基準等）を言語化・構造化することが、最大の知財資産（ゴールデンデータ）となる。

3. 制御された自律性

AIの自律性は、リスク階層別の「人的承認ゲート」と「権限制御」によってのみ安全に機能する。

4. 経営機能へのシフト

知財部門の役割は「処理」から脱却し、創出された時間をIPランドスケープや事業戦略提言へとシフトさせなければならない。